招待講演

みんな同じ人間　同じ命

―My Dream Came True―

岩元　綾（NPO日本ダウン症ネットワーク理事）

Ⅰ．はじめに

皆様，こんにちは。岩元綾です。本日は第50回日本小児保健学会にお招き頂き，有難うございます。また，私のような者にスピーチする機会を与えて下さった，会頭の鉾之原先生をはじめ，座長の田中洋先生，ほかの皆様に深く感謝致します。

現在，私は母校の志学館大学でフランス語と英会話を聴講生として学んでいますが，ブランクの時間には時々，大学図書館の司書ボランティアをしながら司書の勉強もするかたわら，全国各地で講演・交流活動を続けています。

私は昭和48年に鹿児島大学附属病院で生まれました。幼稚園・小・中学校と普通学級で過ごし，高校は県立高校普通科を受験し合格しました。大学進学の時，両親が国語の教師であったため国文科に行かないかと言われましたが，英語が好きでしたので英文科に進みました。しかし，私の大学生活は決して平坦な道のりではありませんでした。筆記をするのがとても遅いので，講義のノートを取るのが大変でした。テープレコーダーを持ち込んで講義内容を取り，家に帰って何時間もかけて聞きながらノートの整理をする日々でした。私がこのようにして大学を卒業できたのは，文字を書き，文章を綴ることがあまり嫌いではなかったからだと思います。それは小学校一年の春休みから日記を書き始め，小学校卒業まで毎日欠かさず書き，中学では「生活の記録」や班ノートを綴り続けた成果だと思います。

それから，中学一年からNHKラジオの英語講座を聞き続けていて，中学三年では英語の暗唱大会にクラス代表として選ばれるまでになっていました。また，高校三年の文化祭で自分の生い立ちを英語でスピーチをし，大きな喝采を受けました。この二つの出来事が自信となって，私に鹿児島女子大学・英語英文学科へ進む道を開いてくれたのだと思います。NHKのラジオ講座は15年たった今でも，楽しみながら毎日聞いています。

1998年3月に鹿児島女子大学（現在・志学館大学）の英語英文学科を卒業しましたが，その年の1月に両親が「走り来れよ，吾娘よ」[1]を出版すると，私たち家族の生活は大きく変化していきました。

大学を卒業してまもなく，ニュージーランドに行ったり，学会や私たち家族の本をテキストに使って下さっている大学や看護学校の学園祭，市・町の文化・人権講演会，障害者団体，学校など，県内外での講演・交流活動を現在も続けています。また，新聞やテレビ，ラジオ・雑誌の取材なども受けながら，絵本の翻訳，新聞や雑誌の原稿執筆など忙しい5年余りが過ぎていきました。

Ⅱ．第3回アジア太平洋ダウン症会議の感動

私を最も大きく変えた出来事は，1998年5月にニュージーランドのオークランドで開かれた第3回アジア太平洋ダウン症会議に参加したことです。その中で私は「私のこれまで」と題して五人のパネリストの一人として英語でスピーチしました。国際会議の舞台で緊張しましたが，15分間のスピーチを途中で息が詰まりそうにな

NPO日本ダウン症ネットワーク　〒899-5111 鹿児島県姶良郡隼人町姫城2331-7
Tel/Fax：0995-43-1670　e-mail：ayaiwa@po.mct.ne.jp

Presented by Medical*Online

りながらも最後までやり終えることができたのは，今大きな自信となっています。

私が『鹿児島女子大学の英語英文学科を卒業しました』と言った時には大きな拍手が起こり，趣味は『音楽鑑賞と辞書を引くこと』と言った時には大きな笑いの渦となりました。会場の人達が私の英語を分かってくれているんだと実感した瞬間でした。終わった時，ホール内が総立ちになって割れんばかりの拍手をしてくれたことを私は生涯忘れることができません。その時の英文を私が読みますので，お手元の和文と合わせてお聞き下さい。

（以下は帰国後，急遽和文に訳したものです）

私のこれまで My Personal History Book

1998・5.9　岩元　綾

皆さん，こんにちは！私は日本から来た岩元綾です。皆さんに会えて嬉しく思います。私は今年の3月20日に鹿児島女子大学の英語英文学科を卒業しました。卒業式は私の人生の中で決して忘れることはできない最良の日でした。とても嬉しい思い出です。

学部の代表が学位記を受け取った後，鹿児島女子大学の学長である砂川先生が卒業生に対して祝辞を述べられました。砂川学長は，このスピーチの中で私のことについて触れられ，「この卒業生の中に岩元綾さんがいることはとてもすばらしいことです。彼女のひたむきな姿は多くの学友たちに深い感動と勇気を与えました。さらに同じハンディを持っている人達に希望と勇気を与えたに違いありません。彼女の努力は素晴らしいものです。彼女の勉学に助力できたことは私たちの誇りです。」(*1)と言われました。

私は砂川学長の言葉に深く感動し，涙が出てきました。両親も涙を流していました。私は今，司書の資格を取るために母校の鹿児島女子大学に通っています。静かな図書館で司書になることが私の夢です。またフランス語も勉強しています。それからまた，フランスにあるルーブル美術館やオルセー美術館に絵を見に行きたいと思っています。

私の趣味は音楽鑑賞と辞書引きです。

今日は，私の生い立ちの本について話そうと思います。

私の両親は1998年1月25日に「走り来れよ，吾娘よ」[1]という本を出版しました。母と父は私の誕生から鹿児島女子大学入学までのことについて書き，私は本の最後に感想を書きました。

私は生まれた時から病気がちで，両親は非常に困っていました。

私は病気のことをあまりよく知らずに育ってきました。大学二年の時に，自分が障害を持っていることを知りました。NHKのダウン症についてのテレビ番組を見ながら，父にそのことを尋ねた時，ダウン症であることを告げられたのです。私はそれについてはかすかに感じていましたが，大変ショックを受けました。頭の中が真っ白になりました。

それから，私は母が私の病気のことについてワープロで打っているのを見ました。それを見た時，とても驚いて信じたくはありませんでした。とても悲しい気持ちになりました。

私は両親が私の生い立ちの本を出版して，病気のこと，家族のことを公表することを知りました。不安で，自分の病気を公表して欲しくないと思いました。悲しくて泣き崩れました。父と母は，「綾はこれまで素晴らしい人生を歩んで来たんだ。怯むことはない。卑屈になることはない。胸を張って誇らしく生きなさい。」(*2)と言いました。

私は自分の悩みを鹿児島市にある児童総合相談センターに勤務しておられる，医師の田中先生に話してみました。先生は「あなたの障害について皆に話すことはとても大切なことです。」と言われました。最初，私は皆に本当のことを言うのができないと思っていましたが，先生の言葉に励まされ，本当のことを話す決心をしました。

そのうえ，私の親戚や両親の友人が私を励ましてくれました。

私はもう何も怖がることはなく，真実を隠す必要はないと思いました。両親が出版したこの本を多くの人達に読んでもらい，障害者の気持ちを理解してほしいと思いました。

本はついに出版されました。その本にはバラのカバーがしてあり，とても美しい色彩でした。私はとても気に入りました。

Presented by Medical*Online

私たちの本が出版されてからまもなく，私たち家族と本の記事が朝日・読売・毎日・南日本・西日本など，その他の新聞に掲載されました。私たちは日本各地から手紙や電話をたくさんもらいました。いろんな人たちが「あなたたちの本に感動しました」，「あなたは私に勇気をくれました」，「この本を読んで涙が止まりませんでした」そして「前途に光を見い出しました」などと言っています。私たちはこのような人々のメッセージに励まされました。両親がこの本を出版してよかったと思っています。

私はまた障害のある子どもたちのために働きたいと思っています。私にはまだたくさんの夢があります。

今の日本ではダウン症に対して浅い考えや偏見を持っている人々がたくさんいます。それは悲しいことです。

人生は短いです。でも，かけがえのないものです。だから私は希望や夢をあきらめません。

私を支えて下さった多くの人々に感謝しています。そして両親には「私を産んでくれてありがとう」(*3)と言いたいです。ご静聴有り難うございました。

(*1) "It is a very wonderful that there is Miss Aya Iwamoto in the graduated students. Her intense figure made a deep impression and courage on the many school-mates.
That must gave a hope and encourage people who have same handicap.
Her effort is wonderful. It is our pride to assist her studies."

(*2) My father and mother said, "You have done wonderfully. Don't be afraid.
Take pride in yourself."

(*3) Life is short, but precious.
That's why I won't give up my hopes and dreams. I am grateful to many people helped me, and I want say my parents"
Thank you giving birth to me."

Ⅲ．講演や交流での出会い

私は日本各地のいろいろな所でスピーチをしていますが，講演の後で多くの人たちが感想を寄せてくれます。ついこの間も，種子島では，長く学校に行けなくて休学していた，私の大学の後輩が講演を聞きに来てくれて，「もう一度大学へ戻る決心をしました」という感想を寄せてくれました。福岡県の前原市では「みつばのクローバーの中に咲く，四つ葉のクローバーの幸せをもらった気分です。」というのがありました。

この5年余りの間に寄せられた感想文は膨大なものです。それらは私に勇気と感動と生きる力を与えてくれます。

その中から，強く私の心に残っている同世代の女性の感想を一つ紹介します。

「ダウン症のことはあまり知りませんが，“障害のある”ということで“可能性を奪われることも多々あるのでは”と思います。綾さんのようにたくさんの子どもたちの可能性を伸ばしていけるようにしていきたいです。“産んでくれてありがとう”と思っている綾さんも素敵だし，そう思わせている周りの方達も素敵だなと思います。大なり小なり，人は課題を背負っていると思います。“背負わされている荷物は重いが，自分で背負っている荷物は重くない”そうです。自分の課題を自分で受け入れた時，自分の存在を肯定でき，“生まれて良かった。産んでくれてありがとう”と言えるのでしょうね。ステキな人生ですね。とても感動しました。ありがとうございました。」(20代　女性)とありました。

このような講演・交流活動の中でたくさんのすばらしい方々と出会うことができました。それは私にとっての大切な宝物です。それを大事にしながら，これからも頑張っていきたいと思います。

Ⅳ．みんな同じ人間　同じ命
―出生前診断に思う―

私は日本ダウン症ネットワークに参加し，出生前診断について知るようになりました。そしてダウン症をはじめとする三つの障害に適用されているトリプルマーカーテストのことを知りました。このような特定の障害のある子どもが生まれないようにする動きは許されることではなく，今生きているダウン症の人たちを否定することになると思いました。これは私一人の問題ではない，どんな障害があろうと，皆同じ人

Presented by Medical*Online

間・同じ命です。命の重さに変わりはないのです。

この検査に対し，多くの学者や医師，ダウン症児の親の方たちとともに旧・厚生省の先端技術医療専門委員会に意見書を提出する運動の一員に私も加わり，二度にわたって意見書を提出しました。ダウン症者本人が意見書を出したのは，初めてのことだったそうです。

その結果，1999年に旧・厚生省の出生前診断に関する専門委員会から「妊婦さんに検査があることを知らせる必要はなく，検査を受けることを勧めるべきではない」という見解が出されたことは，私にとってもダウン症の方達や家族の方たちにとってもとてもすばらしいことでした。全国からたくさんの感想が寄せられていますが，奄美大島での講演会のアンケートに高校三年生が次のように書いています。

「出生前診断は，私の中ではこれは障害を持つ子のためであると考えていました。なぜなら“どうして自分だけが・・・？”と思うこともなくなると思ったからです。でも，あやさんが“産んでくれてありがとう”と言った瞬間私のこれまでの考えは全部消え，自分のことをとても恥ずかしく感じました。大事なことは障害児をなくすことではなく，障害を持つ子といかにうまく暮らしていくか，どうすれば障害を持つ子にとっていい生活が送っていけるかを考えるべきだと思いました。私もこれから，いろんな人たちと触れ，いろんな人たちと交流していき，その人たちを大事に，優しく接していきたいです。」とありました。読んでいて胸にこみ上げるものがありました。今までこの問題を訴え続けてきてよかったと思っています。

V．My Dream Came True

私は夢を追いかけながら今日まできましたが，これからの夢はフランス語の童話を子どもたち，特に心身に障害のある子どもたちのために読み聞かせができるように翻訳して絵本にすることです。また，図書館の司書にもなりたいと思っています。でも，体があまり丈夫ではないので実現するかどうか分かりませんが，大きな夢の一つだったフランス行きは実現し，ルーブル美術館，オルセー美術館，私の大好きなモネの絵がたくさん集められているマルモッタン美術館にも行くことができました。パリは歴史のあるとても美しい町でした。その時の感動を私のパリ紀行として「夢紡ぐ綾―母と娘のデュエット―」[2]にまとめ，2001年1月に出版しました。私が初めて書いた長文の旅行記です。

同じ年の6月にはカナダの童話「スマッジがいるから」[3]を翻訳し，出版することができました。この本はカナダ・バンクーバーのサイモン・フレーザー大学から日本の国会図書館内にある国際子ども図書館に寄贈された，カナダの絵本の中にも選ばれています。このようなカナダを代表する絵本を翻訳できたことをとても嬉しく思います。

また，鹿屋市在中の小児科医・松田幸久先生が書かれた絵本「魔法のドロップ」の英訳をし，“MAGIC CANDY DROP”[4]として出版に至りました。学生時代から童話に関わる仕事をするのが夢でしたので，その大きな夢を二つ果たすことができ，本を手にした時はとても感動しました。

“MAGIC CANDY DROP”は，ダウン症や心身に障害のある子どもたちも小さい頃から絵本の中で英語に親しんでくれたらいいなという思いをこめて易しい英語に訳してみました。世界中の，障害のある子もない子もこのMAGIC CANDY DROPを読んでくれたらどんなに嬉しいか分かりません。

この童話は，1999年の10月に大阪で行われた第4回ダウン症フォーラムの国際ミニシンポジウムで，同じ障害がありながら今も活躍しているオーストラリアの女優，ルース・クローマーさんと一緒に出た時にも朗読したものです。

今，少年たちの痛ましい犯罪が続いていますがそれは悲しいことです。童話は人の心を優しくしてくれます。スクリーンをご覧になりながら童心に返ってお聞き下さい。

（次は私が英訳した英語で読み聞かせをした絵本の一部です）

MAGIC CANDY DROP

魔法のドロップ

by：Yukihisa Matsuda

Presented by Medical*Online

illustrated by：Yasuko Kuroda
translated by：Aya Iwamoto
ぶん：まつだゆきひさ
え ：くろだやすこ

やく：いわもと　あや

Autumn has come to the sanatorium on the outskirts of the town.

Ken has never been able to walk on his own feet. He always rides in a wheelchair.

Ken likes taking his wheelchair through the garden of the sanatorium. Today he has come to the poplar again.

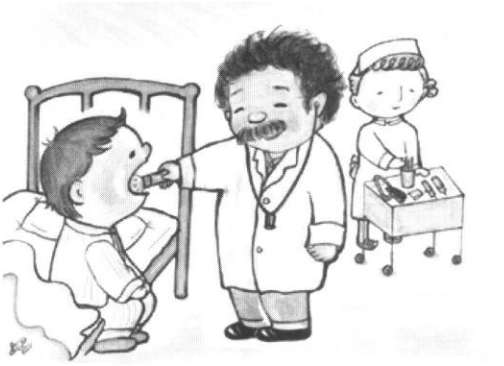
"Wow! What a lot of ants."

The ants are lined up. They are busy going and coming. They are gathering their winter food.

Ken tears the bread to pieces and gives it to the ants. The ants carry the crumbs into their nest at once.

On rainy days, Ken gentle holds his umbrella over the ants.

"Oh, ants! If you get wet in the rain, you will



catch a cold."

There is a check-up every morning in the sanatorium.

Ken's doctor has a mustache. Children call him Dr. Kuma.

"Morning, Ken. How are you today?"

"Fine, thank you."

His doctor is listening to Ken's heart and chest with a stethoscope.

He also examines the back of Ken's throat with a penlight.

"O.K.! You're in good shape!"

Ken smiles. Then, he tells the doctor about the ant he met the previous night.

"O.K. I'llgive you permission to go out. The ants' house is dark, so it will be good to take this."

Presented by Medical*Online

He puts his penlight in Ken's pocket.

Every day that winter, Ken eats a piece of the blue candy drops which he got from the queen.

In spring, the cherry blossoms bloom in the garden of the sanatorium.

Ken takes a walk as usual and has a rest under the poplar tree.

Oh? there is no wheelchair.

Yes! Ken can walk now.

That candy drop which he got from the queen ant was magic.

Ken leaves the sanatorium soon.

"I'm going to an elementary school in my town."

終わりに，島根県斐川東中学校・三年生の生徒さんが私たち家族の本を読んで原稿用紙5枚の感想文を寄せてくれました。その中で「夢紡ぐとは，糸のように長く長く途切れることのない夢を追い続けることだと，私は思いました。」と書いています。とても素敵な表現です。

私はこれからも，21世紀の子どもたちが夢と優しさを持って生きていけるように願いながら，私自身も自分の夢に向かって一歩一歩，自分なりに歩んでいきたいと思います。

今日は本当に有り難うございました。

文　　献

1)「走り来れよ，吾娘よ―夢紡ぐダウン症児は女子大生―」岩元　甦子・昭雄著　かもがわ出版
2)「夢紡ぐ綾―母と娘のデュエット」岩元　綾・甦子著　かもがわ出版
3)「スマッジがいるから」
作：ナン・グレゴリー
絵：ロン・ライトバーン
訳：岩元　綾　あかね書房
4) MAGIC CANDY DROP
作：松田幸久 絵：黒田康子
英訳：岩元　綾　石風社

岩元綾http://www.mct.ne.jp/users/ayaiwamo7/

Presented by Medical*Online